

家庭における親子

■明るい家庭生活のために

甲 斐 直 義

家庭教育には

二本の柱が必要

家庭教育は、親にとっては重荷であるとともに反面たのしみでもあります。家庭教育には、必ず二本の柱がなければなりません。その一つは子どもを養育し、保護し、愛するという暖かい面です。よくいわれる家庭の旦那さんというものの源には、この親の教育態度が必要です。と同時に、家庭はきびしい訓練と修養の場でもなければなりません。この面の教育を私は「訓練」すなわち「しつけ」と呼びたいと思います。これは家庭のもつきびしさの面でもあります。次にこの両者について、順を追って説明してみたいと思います。

□愛情にもとづく

子どもの保育

子どもはすべてお母さんの胎内より生

お母さんも家において、やさしく温かく迎えてやりたいものです。

親と子のふれ合いは何も赤ん坊とか幼児とかいう幼少の頃だけのものでは勿論ありません。子どもが成長して青年期に入っても、成人期をむかえても、やはり親と子のふれ合いは必要です。ただこの様に成長した子どもと親とのふれ合いは、心と心、行動と行動、そしてコトバとコトバのふれ合いといえましよう。さり気なく、親子で交わすジョウ談の中にも、又親子共同でやる仕事の合間にも、「ふれ合い」はいつもあるのです。旅行にでかけたお父さんが、旅先の旅館から電話で、家族のものに安着のしらせを送るのも、立派な「ふれ合い」です。だからこそ、「ふれ合い」には、何もことさらの技巧も知識も不要です。自分の心のおもむくままに、自然に流出し又流入するの「ふれ合い」です。こう考えてまいりますと、家庭で親子がテレビの前に坐ってテレビドラマに一喜一憂するのも、一日の事を話しあいながら夕食の膳につくのも、重要な家庭教育の一環だということになります。私は冒頭に「家庭教育はむづかしい様でやさしいもの」という意味の事を書きましたが、「なーんだ家庭教育ってやさしいものじゃないか」という気持ちになられたことと思います。そうです、家庭教育は本来はやさしいものなのです。それをむづかしくし

れ出したのですから、精神分析学者のコトバを借りれば、「母親の胎内にかえりたい」という一種の郷愁をもつのは自然なことだと思います。又親の方も子どもを、自分の中にとり入れたい（心理学では「自我包含」といいます）という気持ちにかられるのも亦自然でしょう。この様な親と子の間に互いに引き合い求め合う気持ちを「愛情」と心理学では呼んでいます。だから愛情は自然でなければなりません。特に親と子の愛情にはこの自然さが何よりも大切です。例えば、小学校一年生の子どもが、学校から家に帰った時に、第一に発するコトバは、「お母さんただいまあッ」という一声でしょう。この一声こそは、しばらく離れて、みたらなかった親への愛情を最もはっきりとあらわしたものだと思います。だからこそお母さんは、間髪を入れず「おかえりなさいッ」というコトバによって、子どもの愛情の表現を確実に受けとめてやるべきだと思います。子どもにしてみれば

てしまったのは、外ならぬあなた自身なのです。

親子関係に限らず、夫婦でも兄弟姉妹でも、もともと自然の人間の欲望と感情によって結びついた関係に於ては、「自然性」が何よりも大切ではないでしょうか。互に愛し合う男女の間に、その自由な愛の表現が、何か第三者の力によって禁止された時、そこにはかすかすの悲恋の物語りが生まれました。悲恋の物語りは、文字どおり、悲しくも又美しいものではあります。それは第三者の出来事としてみる限りそうあるものであって、もしわが身のことだと考えたら、誰しも惻然たるものをおぼえることでしょう。愛は自然に水が流れる様に発散し吸収する時が、一番人間を幸福にするものです。「親子の間の自然のふれ合い」これが家庭教育の一本の柱であり、それは同時に土台でもあります。この土台の上に立てはじめて、次のきびしい訓練が要求されるのです。

□知性と意志にもとづく

子どもの「しつけ」

戦争前までの日本の家庭は、いわゆる親中心の家庭であり、子どもは「家の宝、国の宝」として大切にはされましたが、所詮それは家や国の所有物でしかなかったのです。親にとっても子どもは、自分の所有物といった気持ちが強く、子どもの教育には、親の意志がすべて優

ば、お母さんは目の前にいながら、何の返事も何のジェスチャーもしないですましているということは、きつと耐えられないほど、淋しい又むなしい気持ちにおとされることでしょう。一年のうちの大半をこんな気持ちを味わっていると、親への愛情の不満が子どもの中の心につもりつもって、次第に心を不安にし、親に対する愛情の表現も、求愛の行動も自然に行うことがむづかしくなると、妙に顔色をうかがったり、特殊な技巧をこらしたりして、親子の間の交渉を行わねばならなくなってしまうのです。親と子の間の溝は次第にふかまって、後ではどうにもならない障壁になってしまいます。これが家庭の悲劇につながることはいうまでもありません。親は子どもに対して、つとめて自然に接して行く様にして下さい。この様な親と子の間の交渉を、私は「親と子のふれ合い」というコトバで呼びたいと思います。「ふれ合い」は子どもが赤ん坊の頃は、文字どおり、肌と

先的であり、子どもの自由意志は比較的に尊重されてはいなかった様な有様でした。いきおい、家庭教育にも、親中心のきびしさが要求されて、親のいいつけを守る子どもはすべて「いい子」、これにそむく子どもは例外なしに「いけない子」とされてきました。所が終戦後、アメリカの占領政策でもあったでしょうが、ことさらに権威を否定し、これに反抗するのが「民主的」だという、あやまつた思想が日本に流入してからは、家庭に於ても「親のいいつけはきかなくてもよい」「親のいいなりになってる子どもはつまらない子どもだ」といった考えが、凡て正しいことだとされて、親の権威は暴落し、子どもの顔色ばかりうかがって、おそるおそる子どもに近づこうとするいとも奇妙な顔の姿さみられる様になりました。親は自信を失いたずらに虚勢をはって、むやみに子どもに威張りちらしては、子どもより軽べツされ、あげくの果ては親自身がノイローゼ気味になって、子どもから逃げ出さねばならなくなるといふ悲惨な結果にもなりま

した。こんな有様では家庭のしつけなど出来るはずはありません。いきおい子どもはわがまま一方に育ち、妙なうぬぼればかり強くなり、道徳も法律も無視して「俺が法律だ」といわんばかりの無法者がそこかしこに出現して、さながら「無法天国」の観をているにいたってしまいました。勿論この様な子どもは現在で

肌とのふれ合いです。今頃は少なくなりましたが、昔は、大家の奥さん等は、自分の子どもの世話ほとんど乳母や女中にまかせきりで、子どもを自らじかに抱きとる機会が非常に少なかった様にきいております。こんな母親の子どもは、親子のふれ合いの機会が少ないために子ども心に親への豊かな愛情が芽生えないままに成人してしまいます。こんな境遇の子どもは、親のみでなく、万物万人に対して、愛情をそそぐ方法を知らず、又その気持もたず、非常に冷たいコトバの氷の様な人間性をつくり上げてしまいます。子どもが小さければ小さいほど、親と子のふれ合いが必要だと私は思います。子どもが小学校に入る前までは、どんな事があっても、お母さんは、家庭にいて子どもの養育と保護に専念するのがのぞましいと私は考えます。近頃は「カギツ子」というのが都会生活の子どもの中には多く且つ問題になっていますが、子どもが学校から帰る頃には、出来たら

もごく一部であって、大多数の現代っ子は、昔の子どもの持たなかった自主性を十分に備えた立派な子どもですが、その様な子どもでも、どこかに何となしに弱さを感じるのがあるが私だけではないと思います。もっと「がまん強い」本当にたくましい子どもに育てるためには、家庭での親の教育にも、今少し筋金のとった節度のある態度がほしいと思います。そこに現代の新しい「しつけ」の問題がうかび上ってまいります。

□習慣の形成

子どもの「しつけ」

例えば、「食事をとる前に必ず手を洗う」というのは、「手を洗う」という行動が前提として行われねば、食事をとる気になれないということですから、立派な習慣形成であり「しつけ」だと思えます。皆さん方は、キモノを縫われる時、縫った後でもキモノの折目がきれいにく様に、アイロンがけをしたり、しつけ糸をかけたたりなさる事と思います。キモノでも洋服でも折目やヒダのはっきりついているのを着ている人は、如何にもキチンとした印象を他人にあたえますね。現在はブリーツ加工が発達して、ヒダのとれないスカートやズボンが出まわって高校生諸君も大分楽になったと思えますが、昔の女学生は、ハカマやスカートの